

ニートの人々とケータイ文化

司会：西之園 晴夫

NPO 法人学習開発研究所，佛教大学

現在の学校や大学教育からみると、ニートの人々とケータイ文化はともにその枠組みからはみ出した存在です。しかし近年急速に増加しているという点では共通しています。ニートが情報社会のもたらす必然的な産物であるかどうかということについてはいろいろと議論があるでしょうが、情報化の進展は産業構造の急激な変化をもたらし、リストラと倒産が日常化して、失業と転職が絶えず起こっているという点では異議がないでしょう。いわゆる変動社会の到来です。

一方、ケータイは情報通信技術の最先端の機材ですし、若者の間に広く普及して、友達のおしゃべり、デートの打合わせ、ゲーム、ブログ、そしてテレビも楽しんでいます。そこには独特のコミュニケーションスタイルがあってケータイ文化とも呼べる世界に若者は生活しています。その世界は多くの教育関係者にはうかがい知ることのできない世界です。その世界の住民は現在の学校や大学の関係者とはまったく異質な文化の中に生きているので、ニートの人々やケータイ文化の理解は、まさしく異文化理解に属するのかも知れません。しかし、今回あえて大学研究者を中心にシンポジウムを構成したのは、ニートの人々と論議するには時間があまりにも限られていて、問題を広く深く見通すことはできないので、研究者がどのように考えているかを紹介しながら、今後、さらに建設的な議論を展開できることを願ってのことです。

私がこのニートとケータイの組み合わせに興味をもったのは、ヨーロッパ委員会(European Commission)が Leonardo da Vinci 計画の一環として推進している m-Learning 計画が、失業者、ホームレス、不本意な就職をしている者を対象としていることを知ったからです。Leonardo da Vinci 計画そのものは 1994 年にスタートしたのですが、m-Learning のプロジェクトは 2000 年から始まり、とくにイギリス、スウェーデン、イタリアが参加して熱心に進められています。イギリスが 1980 年代中頃から教育へのコンピュータの導入計画を発表したときも労働雇用省と協力して若者の高い失業率に対応するためのものでした。そしてケータイを利用した m-Learning の計画もニートの人々を意識したものであったことは興味深いものがあります。

わが国のケータイの技術水準は世界一であるといってもいいでしょう。しかし、教育ではまだ十分に活用されていません。京都ではニートのためにケータイによるハローワークが艸(くさ)川(かわ)麻由美さんによって開発されています(<http://868110.com>)。ケータイを常用している若者に問題があるのではなく、新しい情報通信技術についての将来ビジョンを描くことができない教育関係者や研究者に原因があるといってもいいでしょう。このような状況にあって、今回のシンポジウムが将来ビジョンの構築にいささかでも役立てば幸いです。